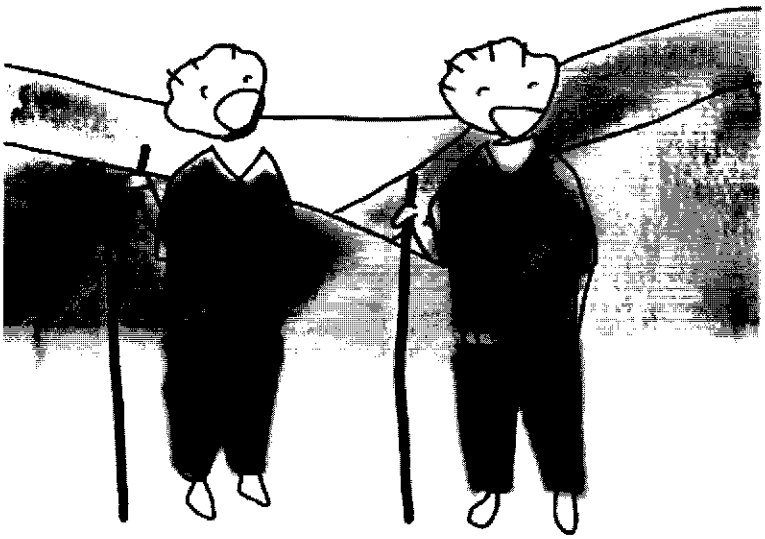
あぶらむ通信

第39号　2017年12月　　あぶらむの会発行
〒509-4121　岐阜県高山市国府町宇津江3225-1
TEL 0577-72-4219　FAX 0577-72-4219
E-mail : abram@hidatakayama.ne.jp



絵：イヨナ・スズキ（フランス）

飛騨便り

2017年11月16日初雪、この地に根付いて30回目の冬のはじまりとなりました。あぶらむ通信お手の皆様にはお元気でお過しのことと思います。

1987年４月にスタートしたあぶらむの会、当初は名前だけの旗上げのつもりでしたが、その月の24日には現在の土地が決定、その後は全てはじめから決っていたかのようにいろんな出来事が先行し、私はその先行する出来事にひっぱられるような生活でした。この30年という月日の間に、24千坪（８万㎡）の土地に大小数棟の建物、いつしか“里”とよばれる環境が出来上ってきました。「人生の良き旅人づくり」という大きなテーマはあったのですが、この30年間はそのこと実現のための舞台づくりに終始してきたような日々でした。その間、それなりに旅人づくりのソフトを展開してきたつもりですが、これからが本番。このあぶらむの里という舞台で人生の良き旅人づくりをテーマにしたどのような内容の劇を演じるのかが問われることとなってきました。年が明ければ６回目の年男を迎える私、もうすっかり定年後人生なのですが、やっとこれからが本番というのですから当分の間死ぬわけにはいきません。果してどこまでやれるのか、30年という一つの節目に私はサンテャゴさんにおうかがいを立てに出かけました。スペイン　サンティヤゴ・デ・コンポステーラ巡礼の道、フランス国境の町からキリストの使徒の一人サンティヤゴ（聖ヤコブ）が眠る教会までの800kmの道。いやというほど自分と向き合わされ対話を重ねる日々でした。28日間で完歩した時、もう少しの間この世の時間を与えるからもう一働きしなさいというお墨付きをもらったような気がした。

○あぶらむ創立30周年記念行事各種

高柳　真　　沖縄愛楽園で出会った人々の絵画展

1968年夏、私は愛楽園ボランティア・グループをつくり、同年代の仲間を沖縄へ誘った。高柳君もその一人だった。定年退職を機に、彼はこれまで愛楽園で出会った人々の絵を描きはじめた。彼の技法は点描画、絵具を面で塗ることをせず、細かい無数の点を重ねて仕上げて行くという気の遠くなるような作業。一枚の絵が仕上るまでにどれだけの時間その描がく相手と向きあわなければならないか、彼の絵から彼はこれまで出会った愛楽園の人々とどのような思いで向きあってきたのか、痛いほど伝わってきた。

人生のよき旅人づくりを目的とするあぶらむの会は、この愛楽園の人々との出会なくしては誕生することはなかった。その意味ではこの30年という節目の記念行事として、彼の力作を多くの人に見てもらい、私たちの出発の地点を考えてもらいたいと思った。

50数点にもおよぶ彼の絵もさることながら、会場の入口に掲げられた彼の文章が来場者の心を打った。

ハンセン病療養所沖縄愛楽園で出会った人々

展示された作品は、国立ハンセン病療養所沖縄愛楽園で出会った人々を描いたものです。

私が大郷氏らに誘われて初めて愛楽園を訪問したのは1971年で沖縄が日本に復帰する前

年でした。主に訪ねた当時の不自由舎は一部屋（14畳）に６～７名が居住され、部屋に出向くと物陰に隠れてしまわれたりすることもありました。作品はその時代に撮っていた写真をもとにし、さらに近年の面会を経て描いたものです。

現在多くの方はすでに亡くなられています。ひとりひとりを描くたびにその話し声や仕草が鮮明によみがえり、懐かしく嬉い作業になりました。そして彼らのたどった道のりを知り彼らの眼が観てきた風景を思いめぐらすと、人間の愚かさや罪深さ、さらには喜びや勇気といった心持に気付かされました。また描きながら、オバーの笑顔のまえで許され救われるような感覚に陥りました。

求められない容姿を描くということはその人の生存の内側に入り込む重い作業となり、立ち止まり、ためらいながらも、その美しさ・崇高さに引き込まれていきました。そして出来上がった作品を他の人にも観ていただきたいという誘惑を打ち消すことはできませんでした。

このたび、あぶらむの会創立30周年を迎え、展示の機会をあたえられました。諸魂庵には亡くなられた愛楽園の多くの方の逝去者記念板がかけられています。この展示会が許されて、『仕方ないわね』とため息まじりに“祝福”されることを願っています。そして私は彼らとの出会いが魂の原型をつくったのであり、あぶらむに連なる私たちの今日のあり様の根底を支えてきたのだと思い返さずにはいられないのです。

2017年　　高柳　真

あぶらむ創立30周年記念会と杉木峯夫トランペットコンサート

この世的には全く無からの出発だったあぶらむ、「石の上にも３年」というが私たちにとっては30年だった。その間、実に多くの人によって支えられてきた。この世の働きを終えて、帰るべき所へ帰って行った人々までもが支えてくれた。私たちもその支援に応えようと精一杯頑張ってきた。30周年はお祝いしようと話し合ってきた。

東京芸術大学名誉教授の杉木峯夫さんは私の高校ブラスバンドで１年先輩、世界的トランペッターで努力の人、尊敬すべき先輩である。あぶらむの30年をこの人のラッパで祝ってやりたかった。

杉木さんは先約があったにもかかわらず代理を立ててキャンセルしてくれた。「先約していたコンクールは来年もある。お前の祝いは一度きりだもんなぁー」と。ただただありがたかった。そして、ピアノ原田治子、フルート土井清子のお二人が華を添えてくださった。

私は杉木さんに二つの曲をリクエストした。「カッチーニのアヴェ・マリヤ」と山口百恵が歌った「いい日旅立ち」。杉木さんの発案で30周年にちなんで30本のトランペットを集めての大演奏をということであったが、私の努力不足で９本しか集まらなかったが、それでもその音色はあぶらむの里中に響き渡った。会場に展示されていた愛楽園の人々の顔、顔、顔。カッチーニのアヴェ・マリヤが静かに鳴り響いた時、そのどれもの絵が輝いてみえた。そう見えたのは私一人だけではなかった。なぜか涙が流れて仕方なかった。

夜の宴会の部はスライドで30年の歩みをたどり、思い出話に花が咲きました。後はご想像におまかせします。台風18号の大接近で大荒れの予報でしたが、宴が終ったころに通過。天気も友好的でこの30年を祝ってくれました。

青木恵哉師の足跡を訪ずねての旅

広島カープ女子ならぬあぶらむ女子が沖縄に集い、とんでもない企画を立て実現するように私に提案してきた。ハンセン病療養所沖縄愛楽園入所の人々にその苦労を吹きとばすべき上質の笑いを提供しよう！あぶらむでこの10年間、素晴しい落語を見せてくれた「桂歌之助落語会in愛楽園」の誕生である。何かと敷居の高いハ病療養所、落語という媒体を通して少しでも多くの人に関わってもらえたらという思いもそこに添えられていた。

せっかくならばその際、愛楽園の創設者であり、23才の私にこの世の最期の言葉を託された青木恵哉師の足跡を訪ずねるスタディー・ツアーも併せてということでこの旅の実現となった。

本土からの参加者20名、沖縄からは聖公会沖縄教区主教の上原栄正大妻ら８名という多数の参加者を得た。また歌之助さんの落語会には80人余とこれまた予想外の盛況だった。

参加者に青木先生の足跡がわかりやすいようにとレジメを作成したが、つくりながら改めて師の生涯の偉大さと困難さを実感させられた。そんな人からの最期の言葉を自分はどのように受け止め、生きているのか、自分を見つめさせられる旅でもあった。（詳細は後述）

○あぶらむの近況　その他

あぶらむ里山生活学校　その後

何らかの理由で学校に行かない子、行けない子、家庭裁判所の補導委託制度の元でここで生活を共にする少年、養育里親として養護養育を必要とする子との生活等、これまでの個々の活動を整理し、「里山生活学校」という枠組の中で有機的に体系付けてみた。

「人生は旅、私たちは旅人。人生の良き旅人育て」を目的とするあぶらむの会、課題をかかえた若者への支援や関わりを、この里山生活学校を通してといろいろ案を練ってきた。

家裁の補導委託では１年９ヶ月振りに少年がやってきた。少子化の影響で少年犯罪も減少、それはそれで結構なことなのですが、少年の受け入れを受託した私たちは、いつやってくるかわからない少年をいつでも受け入れ可能状態にしてスタンバイしていなければならないのです。待機電力のようなもので、これはこれでそれなりのエネルギー消費となるのです。

そんな現状の中、最高裁判所より各家庭裁判所に対して、これからはもっと「補導委託制度」を活用するようにという指示が出たとのこと。これからは以前のように家裁少年との生活が多くなるのでしょうか、多くなったら多くなったらで、また、なければないなりに、いずれにしても多くのエネルギーが求められます。まだまだ老いている訳には行きません。

また、養育里親に関しては地元高山の子ども相談センターが今後のことに関して積極的に動いてくれています。今回はこれ以上の報告はできませんが、次回には新しい展開がおこり、課題をかかえた若者支援の中核となる「里山生活学校」について皆様に報告させていただくようになるかもしれません。その節は宜しくご協力のほどお願い申し上げます。

里の自然

今年は全国的にカメ虫の大発生とか、それも山里より街の方で大発生とか。あぶらむの数

少ない悩みの一つはカメ虫です。秋には越冬のため家に入ってき、暖房がきくと冬中大活躍。そして春になれば外へ出て行くのですがその時もまたゴソゴソ。都会（街）からやってきた人はその度にキャーヒーと大悲鳴。なにしろあのクササだから仕方ありません。でもその悲鳴をきくたびに私たちは身が縮まるのです。ここだけの特別の問題だと思って……。でも街での大発生でカメ虫問題が広く共有されたように思い、少しは気分が楽になるのです。沢山のカメ虫が下界に出て行ったせいか、おかげでカメ虫の数はこれまでの最底を記録しました。何ごともお互いに分ちあうことが大切ですね。助かりました。

冬前の大仕事は里の落葉集め、その量たりや大変なもの、何くそ大型ホイール・ローダーのバケット20杯は優に越えるのです。この落葉を山にしてつくねておくと、３年後には立派な腐葉土となり畑や田へ。でもその労力たりや大変なものです。循環を大切にした自然農法というのは手間ヒマかかるものなのです。私たちの旅の舞台である地球環境問題を考える時、この労力は当然のこととして支払わなければならないものなのです。どうぞ皆さんも落葉集めにご参加下さい。

今年は創立30周年ということであれこれ多忙な年となりました。老齢期の者には疲れは後になって出るというから気をつけなければなりません、あの世に行ってから出てくれればちょうどよいのですが……。

それではどうぞよいクリスマスを、そしてよいお年をお迎え下さい。

2017年12月

あぶらむの会　代表　大　郷　　博

あぶらむ創立 30 周年、多くの人に祝ってもらいました。

青木恵哉師の足跡を訪ねての旅と桂歌之助落語会 in 愛楽園

師の著書「選ばれた島」からその足跡をまとめてみた。その作業をしながら、いかに苦難に満ち満ちた人生だったか、改めて考えさせられた。そんな人から私がもらったこの世の最後の言葉の「人生は……」。末期の苦しみにかき消され聴き取ることが出来なかった一言葉、自分の人生、その一言葉を探し求めての旅であったことを改めて気づかされた。

青木恵哉師の足跡

◎1893年（明治26年）４月８日　徳島に生まれる

・本名　青木安次郎　２男３女の末子

・16才の時発病 ― 当時は血すじの病気といわれ、父は亡母の貞操まで疑う。また２人の姉も離縁される。

・兄夫婦に子どもなし。妻の妹の子を養子に迎える。これを機に家を出る。病気平癒を祈願し、お遍路に出る。（３回）

1907年（明治40年）ライ予防法成立

1909年（明治42年）大阪、高松、熊本、東京、青森に療養所設立。

945名収容される。

当時の内務省は真っ先に、ライ濃厚地沖縄県に公立療養所設立の計画を立案した。これを受け沖縄県当局は療養所用地を現在の那覇市郊外天久に選定し、当時の内務大臣 原敬の許可を得た。しかし、沖縄県協議会は「那覇市将来の発展を阻害する」との理由で反対、否決。その結果、1910年（明治43年）から1929年（昭和４年）までの20年間、沖縄県は九州療養所に合併され、県内患者は九州熊本療養所へ送致していた。

◎1915年（大正４年）12月　大島青松園入所

・22才、３回目のお遍路の途中、自分の意志で入所する。園名を江本安一とする。

・青松園にて三宅官之治、長田穂波のクリスチャンと出会い大きな感化を受ける。

◎1918年（大正７年）25才　受洗

・南長老派宣教師エリクソンより洗礼を受ける

・やがて霊交会が生まれる。

・1922年（大正11年）父の死によって帰省。在宅のまま近くの被差別部落への伝道をはじめる。

◎1923年（大正12年）熊本の回春病院に入院

・東京多摩全生園に向う途中 熊本へ寄り道、そのまま回春病院に入院する。８月11日入院許可される。その20日後関東大震災がおこる。大きな力に守られ、導かれていることを実感する。

・回春病院入院後、ペンネーム苔石から恵哉に改める。

恵哉 → 出典「我生くるにあらず、キリスト我内にありて生くるなり」（ガラテヤ書２：20）
・1924年（大正15年）四国伝道のため、回春病院を出る。その背後には玉木愛子さんへの熱い思いあり。

◎1927年（昭和２年）沖縄病者伝道へ。備瀬に本拠地を置く。
・岸名 兄の沖縄伝道失敗
・四国伝道中、ハンナ・リデルより沖縄の病者を助けよとの命を受ける。
・1927年２月28日鹿児島出港、３月２日荒砥司祭と一緒に沖縄に着く。この時乗船した安平丸、帰路沈没。この時も大きな力によって守られていることを実感する。
・病者伝道の拠点を備瀬に置く。その理由はハンナ・リデルより資金援助を受け、沖縄伝道の情報源となった病友 知念八郎が伊江島の人であり、家庭の事情で島に帰っていたから。
・備瀬の後原（くしばる）に拠点を置き、本部、今帰仁、屋我地、大宜味、国頭、伊江島を伝道区域として、隔離患者50名、浮浪患者14～５名をケアする。
・源次郎さんの死 ― 沖縄では野山で犬猫のように最期を終るものが少なくない。療養所が欲しい！療養所を建設しなければとつくづく思った。（P.111）
・青木先生の病者伝道、訪問患者250名余、内120名以上が洗礼を受ける。（P.149）

◎1930年（昭和５年）備瀬から屋部に移転
理由：支援者のリデル女史より家の新築が提案される。これに対して青木師は反対、その理由は喜瀬に療養所設置に対して地元の猛反対があったばかり、民衆への刺激をさける。それならばせめて風呂だけでもとの再提案あり。病者にとってはありがたいこと、しかし、備瀬は水不足の地。ならば比較的水豊富な場所でということで、同病者の東江新友さんの住んでいた屋部の家近くへ引越すことになる。青木師は屋部での５年間の生活は最も楽しい時期だったと記している。

◎土地取得　1930年（昭和５年）
・沖縄県の療養所の設置、喜瀬（きせ）に引き続き宇茂佐（うもさ）も失敗する。青木師、行政の無策に怒り、自分の力で道を開く決心をする。
・大城平永さん、屋我地島済井出の突端にある大堂原（うふどうばる）の土地情報をもってくる。3000坪で坪単価５銭。当時の沖縄では自給自足体制で生活するには250坪で一人可能。12人での共同生活を計画し、それを突破口にして療養所へと進展させて行くことの案を練る。（P.189）
・この土地購入に青木師が関与しているということで一度は流れるが、大城平永さんの努力で大城平永名義で昭和５年に1500坪、翌６年に1500坪を購入することに成功する。（詳しくはP.189）

◎嵐山事件
・沖縄県の保養院（療養所）設置失敗の経緯
　天久（那覇市）→ 喜瀬（名護市）→ 宇茂佐（この段階で屋我地に土地取得）→ 嵐山

・1932年（昭和７年）県は薬草園を造るという名目で嵐山に土地取得し、建設資材を運び入れる。
・嵐山　→　羽地村、今帰仁村、名護町の水源地、分水嶺である。
　　呉我（こが）川、古我地（こがち）川　→　羽地村
　嵐山　―　　大井川　→　今帰仁村
　　屋部川　→　名護町
・羽地、今帰仁、名護の３町村、「我らの屋根に「便所」をつくるも同然！」と猛反発。特に羽地村では村長以下全役場職員総辞職して対抗、県は計画を断念する。世にこれを嵐山事件と呼ぶ。

◎青木殺し　1934年（昭和９年）１月１日
・病者の生活環境向上のため、失敗に帰した嵐山の資材入手を計る。窓口は名護警察署であり、当時の山本署長は病者の側に立ってくれ尽力する。
・これに気を許した青木師、署長に大堂原の土地のことを伝える。これが「ライ患者の珍しい陳情」として新聞にスッパ抜かれる。（P.212）
・屋我地島のはずれであれば嵐山のような大騒動には発展しないと読んだ青木師は、病者の固い決意を示すため大堂原座り込み、占拠することを決断する。
・済井出部落民の反対が強く、病者の大堂原占拠の主謀者が青木であるということが判明すると、部落で青木殺しの密約がかわされる。
・1934年（昭和９年）１月１日、青木殺害決行の相談会に出席していた大城平永さんの実弟 清光さんが、このことを兄 平永さんに伝える。平永さんの知らせで殺害は未遂に終り、青木師は深く茂ったアダンの葉に守られ九死に一生を得る。（著書「選ばれた島」はこの事実から最初は「アダン葉の影に」という題名で出版される予定だった）
・大堂原占拠は失敗に終るが、占拠をとく時、「自分達は去るが今後当局が事を運ぶ時は反対しないでほしい」とし、今の時点しか考えない部落民の心理をつき、言質を取る！

◎屋部の焼討事件　1935年（昭和10年）６月
・那覇市の浮浪ライ患者 50名余が衛生上の問題となる。青木師と親交のあった救世軍 花城武男大尉が青木師らが住む屋部に収容することを提案する。
・これが「ライ救護所設置計画」と題して、新聞記事となる。
・当時屋部の部落民は病者に対しては友好的だった。村の共用井戸は病者使用禁止だったが、病者相手に飲料水を売る店もあった。
・新聞記事に怒った部落民は当時20人ほど住んでいた青木師の家を焼き払い、他村への退去をせまった。また同じく安和にあった隔離小屋３棟も焼かれる。
・以後、部落の入口に「ライ患者入るべからず」の立札が立てられる。

◎ジャルマ島へ　1935年（昭和10年）６月
・屋部の焼打ちで行き場をなくした病者、羽地内海屋我地島500mほど沖にある無人島 ジャルマ島へ逃げ込む。
・ジャルマの意味 → ンジャ泊りの転化で、卑賤な者の泊り場所の意
　ンジャは 買れた者、奴隷の意味

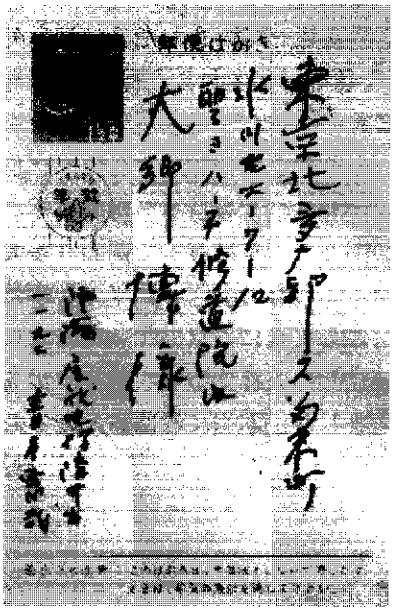
・当初の人数は24～５名だったが、後に夫婦４組、子ども３人を含む40名となる。その内２名がジャルマにて死亡。
・この年（1935年．昭和10年）10月28日 鹿児島県星塚恵愛園が開所。収容人数300名の内沖縄より135名。内ジャルマ島より27名収容されて行く。（11月30日）
・ジャルマ島の総面積300坪余（1000㎡）、荒天時には島全体が潮をかぶるような劣悪な生活環境だった。
・自分達の土地、一度退去した大堂原へ決死の覚悟で移住することを決意する。ジャルマ島での生活は６ヶ月におよんだ。

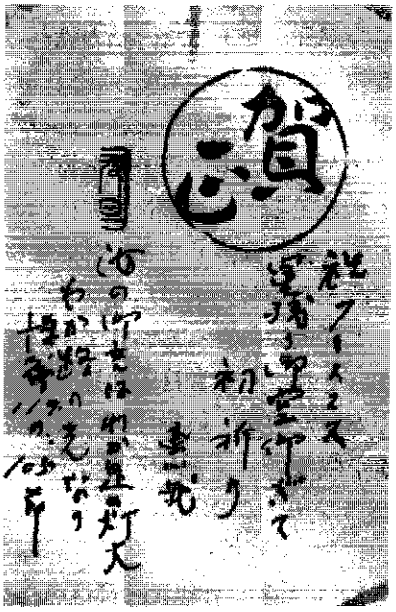
◎約束の地 大堂原へ　そして愛楽園誕生
・1935年（昭和10年）12月27日、済井出、大堂原へ移住決行。翌12月28日より生活開始
・最初は部落民の強い反対にあったが、次第に弱くなって行き、黙認というかたちになる。「私たちが大堂原移住に成功したのはあの言質があずかって力があったのだと私は今でも固く信じている」と青木師は著書の中で記している。
・1937年（昭和12年）５月12日、同地に沖縄MTL相談所開設（MTL→Mission To Lepers ライ病者への伝道）。青木師の3000坪の土地をMTLに寄付する。
・1938年（昭和13年）２月１日、沖縄MTLは相談所の経営を沖縄県に移管。県は厚生省と交渉し、ここに国立ライ療養所国頭愛楽園が誕生する。

「終りまで耐え忍ぶ者は救われるべし」
（マタイ伝10章22節）

痛み経て　真珠となりし　貝の春

◎1969年（昭和44年）３月６日正午過ぎ　青木恵哉師逝去　享年75才





桂歌之助落語会 in 愛楽園

通信原稿入稿日が過ぎてから催された本企画、どのように原稿を間に合わせればよいかと苦慮していたら、「何なら私、書きましょか」と歌之助さん。超多忙な人からの救いの手、地獄で仏のような心持ち。感謝の一言です。ハ病療養所での落語会、こんな取り合わせ、これまであっただろうか。沖縄でははじめてであることは確かである。歌之助さんの気持がよく伝わってきます。

「沖縄を訪れて」

桂 歌之助

今回沖縄を訪れる事を知人に話すと「それは楽しみだね」と言われましたが私の心中はそうではありませんでした。ハンセン病の元患者の方々に落語を聞いて貰うという事で沖縄行が決まったのですが、正直に申しまして私の心には常に「恐れ」が在ったのです。私のハンセン病についての理解はニュースでたまに見聞きする程度でしたから、実際に元患者の方々と対面して自分が何かの拒否反応を起こすのではないか、起こさないまでも自分の心に立ったさざ波を見透かされるのではないか。過酷な人生を送って来た人に馬鹿馬鹿しい落語を喋って良いものなのか、何気なく話した言葉が皆さんの心を逆立てるのではないか。初めての土地で初対面の人達に落語を話す時に不安はつきものです。しかし今回は不安ではなく恐れを私は感じていたのです。落語会当日、高齢で移動も困難な中、お越しになった在園者の方々の反応を高座から確認する事は出来ませんでしたが、私にとって貴重な経験となったのはむしろその後でした。数人の方の居室にお邪魔してお話しする事が出来たのです。それこそ湧き上がる恐れを封じ込めようと心を固くして部屋へ入ると、私の恐れなどは全くの杞憂でそこには、足腰が弱って落語を聞きに行けなかった事を丁寧に詫びる、朗らかで可愛らしいおばあちゃんがいたのです。お会いした四人共に同じ印象で、緊張が解けた自分の顔が自然とほころぶのが分かりました。私の恐れは無知から生じていました。病気への無知、元患者さんへの無知。無知は恐れを生み、それはある時敵意へと変わる。科学、情報の未発達だった時代、無知から生じた差別や迫害もあったかと思います。しかし現代ではそんな言い訳は出来ません。分からない事には予断を持たず、あやふやな情報に惑わされず、自分の目と耳で確かめてよく考える。そして青木先生の万分の一でも信念を持って行動する。そう思えたのが私にとって一番の収穫です。大郷先生は愛楽園と五十年に渡って関わり多大な信頼を得ておられます。その大郷先生が私を信頼して今回あぶらむの会三十周年の行事に起用して下さいました。大変光栄に思っております。また落語会実現にご尽力頂いた皆様に心より御礼申し上げます。それにしても日曜礼拝で初めて拝見した大郷先生の牧師姿。最初はコスプレにしか見えなかったのが、最後は板に付いて見えました。本当に牧師さんだったんだ。これも今回の密かな収穫。

あぶらむの里　３ヶ月滞在記

（理事）前田 晃伸

あぶらむの里は、今年で30周年を迎えた。私が来始めてから10年が経った。あぶらむの見張り犬「ぶぶ」は14才の老犬になった。少し耳は遠くなったが、暑い夏を乗り切り、雪の季節になってすっかり元気を取戻した。

今年は２月を除いて毎月延10回、あぶらむの里で通算３か月以上過すことが出来た。今年の出来事の中で３つのトピックスをご報告します。

話その１。１月末日のあぶらむ近隣班の新年会初参加の話。昨年の少雪と変って、１月下旬には大雪が降り、久々に雪下しが大仕事だった。でも今冬は、大郷先生が考案したハシゴとトヨを組合せた大型雪下し装置の開発で、高い屋根の上での雪下し作業は格段にスピードアップした。一仕事終った夜は、大郷先生、静谷さんと３人で外で食事をする約束になっていた。ところが夕方、育さんから「夜は近所の方々との恒例の新年会があります。フグ料理も出ます。」という話をきゝつけ、私はフグにつられて、この新年会に飛入り参加することになった。場所はあぶらむの里の隣の「八光苑」だった。会が始まる前に、八光苑の女将に挨拶したら、「どちらから来たの」と問われ、「千葉県船橋市」と答えたら、更に「船橋のどこ？」と追加の質問。「丸山」と言ったら、今度は「何丁目？」と。「３丁目」と言うと、突然エーッ！と。何と女将の姉さんの嫁ぎ先が私の家のすぐ近くで、毎朝散歩する時に顔を合わせるご夫婦でした。偶然とは言え、不思議なご縁でした。新年会は大宴会場の大広間。クジ引きでコの字型に座った席は、隣が鉄工所の奥方。その隣の端が最高齢で孤高のお婆さん。初参加の新年会で勝手がわからないまゝ３時間、個性の強い方々と親しく過さして頂いた。最高齢のお婆さんは一寸腰も悪く、座ったまゝで、誰も話しに行かないので、私が専らお酒のお相手をつとめた。盛上った宴会も終りを迎えた頃、お婆さんはすっかり出来上った状態になっていた。飲ませた責任もあり、私がバスに乗るところまでサポートする役をになった。酔った割に元気なお婆さんは、「もっとしっかり抱いてよ」と。これが結構大仕事。両手に宴会のおみやげをしっかり握りしめ、一寸前かゞみ状態なので、どこを、どう抱きかゝえるのか一苦労。何とか長グツをはかせバスまで抱えあげた。

育さんと２人であぶらむの里に戻ると、夜の会食をすっぽかされた大郷先生は、家の前でビールも飲まずにお出迎え。一度も参加したことのない新年会の様子が気になる雰囲気。ここに記載できないような情報を含めて、近隣の方々との宴会の様子を報告すると、「……」。

翌朝、心配になった私は、ぶぶを連れてお婆さんのお家まで散歩。雨戸が開いていて、ホッと一安心。

「昨夜の珍入者が来た宴会は、近隣の方々の間では、どのようなウワサ話になっているのか、いささか気になった。」

話その２。あぶらむの里は恒常的な人手不足。大郷先生が企画立案した超大型材料小屋

は、構想してから丸１年、基礎工事と支柱立てが終ったまゝの状態が続いていた。私が先生に「ローマの遺跡状態は、いつになったら解消するの」と質問したとたんに、先生の闘志に火がついて、３ヶ月超で、大材料小屋は完成した。出来上ったのを見ると、こんな巨大な建物をよく作ったものだと感心するしかない。

今年は、この大きなボトルネックが解消したので、順番待ちの作業は順調に進んだ。新しい作業棟への、木工工作機械の移転作業である。旧作業棟から新作業棟へ、約50m近い坂道を大きな機械を一台ずつ移動する作業は、ピラミッドの石積み作業に似て、極めて危険で重労働である。使う道具は、コロとワイヤーとペローダーだけ。６月、７月と暇を見つけて、一台一台引上げる作業が続いた。最後の重量600kgの大物機械を引上げる作業をしている時、高齢の武藤主教が登場した。主教は危険をかえりみず、作業を手伝ってくれた。朝の９時頃スタートした難作業は、ワイヤーをかけ、コロを使って、部屋の間仕切りを越え、スロープの難所に差し掛っていた。３人で少しずつ移動させていた時、私は一寸「小用に」と、その場を離れた。重い大きな機械は、天井のハリにワイヤーをかけて転倒しないようにフックがかゝっていたので、私は安心してその場を離れた。外に出ると、軽トラックがあったので、母屋まで戻って、のんびり用を済ませ、５、６分して戻ったら、２人の司祭が、なぜか重たい機械をスロープの下側で必死に支えていた。事情が良くのみ込めないまゝ、涼しい顔で３人で危険な状況を何とか回避したら、両司祭が２人そろって「随分長い小用だったね」と……。

思わず「チョットと言ったけど、小用と言ったですかね」と反論したら、いつもは温厚な武藤主教がこの時だけはハッキリと「チョットおしっこと言いましたと」証言。これで事件の背景がやっと解明された。２人の老闘士は、小用と聞いたので１分位経ってから、２人だけで作業を再開。ストッパーを外して、少しずつ動かそうとしたら、自重で機械がズルズルと動き出したとのこと。すぐに戻ってくるハズの私を期待してたが、いつまでも戻って来ず、２人はスロープで必死に機械を支えるハメになったとのこと。チョットした小さな大事件でした。

話その３。今年あぶらむ30周年記念会のあと、初めて「大人の学芸会」が開催された。岐阜の教会から聖歌隊の皆様が参加され、きれいな歌声をひろうしてくれた。その次には、池渕医師作曲の大自然を難しい倍音律でホーミーを歌って全員大感激。私にも何かやれと言われたので、小学校以来のハーモニカで参加した。一応それなりの曲は準備したが、２曲終ったところで、池渕夫妻の長男然（あり）君が、ハーモニカで参加してくれたのですっかり助かった。そのあとは高柳さん、静谷さん、高橋さんのプロ級のギター、大郷先生のトランペットで大いに盛上った。

このように今年もあぶらむは、いつもの通り高齢者から小さい子供まで皆元気な一年でした。

スペイン　サンティヤゴ巡礼の道　800km

大郷　博

今年はあぶらむ創立30周年という記念であり区切りの年、私は永年の念願であったサンティヤゴ巡礼の道を歩くことにした。歩くことの理由は外にもあった。
15年ほど前、親しくさせていただいていた沖縄愛楽園入園者のＩ夫妻から「自分たちのかわりに聖地旅行をしてきてほしい」という依頼をうけた。そしてその旅費にと多額のお金を渡された。聖地旅行という依頼は引受けたものの、私もそれなりに働いている身なので旅費は遠慮した。すると日頃温厚なＩさんは厳しい顔で、「これは私たちからのお願い事、このお金は納めてもらわなければお願いしたことにならない」ときつく云われた。私は受取ってはみたものの、多くの代償を支払って上で得たそのお金、私自身何の代償を支払うことなしに用いることは自分の気持が赦さなかった。

Ｉ夫妻が私にたのんだ聖地旅行とは、イエスが生まれその教えをなされたキリスト教発祥の地イスラエルであると思う。20数年前、私はエジプトから緊張のシナイ半島を縦断してイスラエルに入った。短い日数の聖地旅行であったが、快適なバスに乗ってのそれは聖地観光旅行だった。そのような旅に私は託されたこのお金を用いることはできなかった。自分も自分なりの代償を支払っての聖地旅行、その時スペイン　サンティヤゴ巡礼の道800kmが私の頭に浮んだ。キリスト教の三大聖地はエルサレム（旧市街）、ローマ（バチカン）、そしてこの聖ヤコブが眠るスペイン　サンティヤゴ・デ・コンポステーラである。Ｉ夫妻の思いと多少違うが、これも立派な聖地旅行である。

そしてもう一つ、一昨年７人姉兄で４番目の姉がはじめて欠けた。
もう長くはないということなので私は見舞いにいった。どう声をかけてやればよいか私は迷った。「美ちゃんヨ、あなたは我々７人きょうだいの魁、トップバッターなんだから元気で逝かれ。順番ならば私が殿（しんがり）、殿としてしっかり役目を果してくるから、あんた安心して逝かれ」といっていた。死に行く人に向って「元気で逝かれ」というのだからおかしな話。姉は静かに笑っていた。後で「あんなこと云うのはヒロシだけ」、お母さん嬉しそうだったと姪はいっていた。それから一週間後、姉は静かに旅立っていった。死に行く人に向ってそうはいったものの、自分は殿としてどう生き死んで行くのか、葬儀の後その足で私はサンティヤゴ巡礼のための靴を買って家に帰った。

2017年５月28日、田植えを終えた私は１ヶ月の予定であぶらむを後にした。

サンティヤゴ巡礼の道は多種のルートがある。その最も代表的なのがフランスの道である。フランス国境の町サン・ジャン・ピエ・ド・ポーを出発しピレネー山脈を越え、スペイン北西部ガリシア地方を横断しての800kmである。

このコースで最大の難所は初日のピレネー山脈越えである。出発地サン・ジャンは海抜200mで最高地点のレポエデール峠は1430m、1200m余の高低差を一日で歩き切るのである。日ごろあぶらむの里内以外歩くことのない私、この難所を越えることができるか全く自信がなかった。

出発地サン・ジャンに向けて出発の朝、留守宅から緊急電話が入った。いつも私を支え、

励ましてくれた先輩牧師、河野裕道司祭の急逝の報だった。あまりもの突然さで驚きとそして悲しみで一杯だった。冷たい小雨降る中の難所ピレネー山脈越え、私は誰はばかることもなく一人泣きながら歩いた。泣いても泣いても涙が出てきた。気がついたら峠を越えていた。河野先生が背中を押してくれたものと今も思っている。そして、それが呼び水となったのか、それから続く日々、毎日がこの世の働きを終え、帰るべき処へ帰っていった人々との限りない対話だった。

難所ピレネー山脈を越え、スペインに入ると、メセタの大地と呼ばれる海抜800mほどの来る日も来る日も遮(さえぎ)るもののない地平線を見つめての道が500km、半月間ほど続いた。巡礼者の中ではこの区間、変化がないと車でスキップしてしまう人が多いというが、私はこの区間が一番印象深かった。

巡礼の一日は朝４時ごろの起床にはじまる。６月、異常熱波に襲われた今年のヨーロッパ、午後４時ごろに42℃まで気温が上った。歩けたものではない。朝、可能な限り早立ちして、午後２時ごろに歩き終えるしか手はなかった。一緒に歩いたフランス在住の鈴木さんは元アルプスの山岳ガイド、歩きのプロである。朝５時ごろに出発し、朝食を取るのが９時ごろ、その間は水だけ。朝食は生オレンジ・ジュースとチョコレートパン、そしてカフェオレ、たまに玉子焼きを食べることもあった。昼食はなるべく食べない方が体に楽ということで、水分だけでほとんど食べることはなかった。１日24～５kmから多い日で40km、結果的にはこの方が体に楽だった。その日の巡礼宿に着き、シャワーを浴び、洗たくを済せてから腹一杯のカーニャ（ビール）と昼夕兼用の食事。日没が10時過ぎというのに７時ごろにはもうバタンQ－だった。このペースでの歩きくりかえし28日間だった。

遮るもののないメセタの大地と呼ばれる地平線を見つめての500km余の日々、一般的には「先が見通せない、先が見えない」が不安の代名詞のように云われるが、歩いても歩いても「先が見える、見渡せる」ということは私には辛いことであった。心に変化がおこらない。道を遮ぎる丘や山や曲がりくねった道があると、あの山の向うにどんな風景が待っているのだろう、あの道を曲ると何があるのだろうと心に変化がおこった。「先が見えない」ということは一つの「救い」のように思われた半月間だった。

そんな単調で平凡な日々、嫌やというほど自分と向き会うこととなった。自分と向き会わざるを得ないのである。巡礼が終ると人として変るということ、何かわかるような気がした。しかし、悲しいかな自分と向き会うということにも限界があった。その事を決してないがしろにした訳ではないが、それだけでは自分の心を維持することはできなかった。
次に出てきたのは自分を教え導いてくれた人でこの世を去った人々との対話だった。
両親はじめ愛楽園で出会った人々、実に多くの人達が出てきた。写真でしか観たことのないジイ様バア様までが出てきたのには驚いた。
しかし登場してきたどの人もどの人も重い重い重荷、十字架を背負いながら生きてきた人達だった。

「あなたは何故、私にこのような重荷、十字架を背負せたのですか」と、神や仏という存在に対して問い続けてきた人達だった。戦争で全てを失い再出発した親、ハンセン病と

いう病気のため人間としての全ての基盤を奪い去られてそれでもなお、そこから生き抜いてきた人々。どれだけの自問自答、どれだけ神や仏にそのことの理不尽さを訴え、この自分が背負って行かなければならないことの理由を求めてきたことだろうか。

しかし、「己が十字架を背負いて汝は我に従え」、現実受容というその中から生まれてきた生き方は私には一つの大きな光だった。その人が話し相手としたもの、その人が信じたものに、私も信頼を置いて生きよう。私も信じて生きよう、自分はそう思って生きてきた。そんなことが走馬灯のように自分の中をグルグルとまわった。

それでも歩くことによって生じる肉体的苦痛は容赦なかった。そんな時私の口から出てきたのは聖歌455番だけだった。それ以外の歌は出てくることはなかった。

1　主にのみ　十字架を　負わせまつり
　　われ　知らずがおに　あるべきかは
2　十字架を負いにし　聖徒たちの
　　み国によろこぶ　幸や　いかに
3　わが身も勇みて　十字架を負い
　　死にいたるまでも　仕えまつらん

そんなこんなで800kmはどうにか自分の心を維持することができたが、さて人生の最大の事業である死、その時はどんな自分であれるのか、お寒い限りだった。

さて年が明ければ私も６度目の年男、もうすっかり老齢期に入ってきた。魁として逝った姉との約束、殿としての私の心構えというば前述したようにお寒い限である。

でもサンティヤゴ巡礼の道を終えて今の私の気持は、「あの人も逝った。この人も逝った。だから自分も逝ける」。この世に在って心を通わすことができた人を幾人もっているか、それが死に行く時の大きな力となるのではと思った。そしてその究極の人はイエス、それが信仰であると愛楽園で出会った人々が私に語っているように思った。サンティヤゴ巡礼の道800kmは私にとって得がたい大きな大きな体験、そして経験となった。

第15回子どもから大人までのネパールの旅

期間　2018年３月23日(金)～４月３日(月)

・主な旅行地域　首都カトマンドウーチトワン国立公園－ポカラ－
　　ヒマラヤが見える村ガンドルン
・参加条件　小学生以上であれば一人での参加も可能です。
　　あぶらむ及び現地スタッフがお世話します。
・〆切り　2018年１月20日(土)

※お問い合わせはあぶらむの会まで　Tel 0577－72－4219

『第５期通常総会　開催報告』

第５期通常総会を2017年3月にあぶらむの里で開催いたしました。多くの方に参加いただき、心よりお礼申し上げます。

日　　時：2017年３月18日（土）16：00～17：30
場　　所：あぶらむの里　あぶらむの宿（母屋）
出 席 者：正会員23名
総会次第：
（1）開会挨拶
（2）議長・議事録署名人・書記の指名
（3）定数の確認
（4）議案
・役員の選任
代表理事　大郷博（留任）
理事　　前田晃伸（留任）、山田益男（留任）、西田邦昭（留任）、大郷育（留任）、西村正和（留任）、杉木峯夫（新任）、柴原薫（新任）、川上美砂（新任）
監事　　川上詩朗（留任）
・事務局員の指名
〔東京〕宮崎秀貴（事務局長）、長谷川秀司（監事補佐）、下田英一、下田由香、小川卓、酒井英代、倉持章子
〔あぶらむの里〕山田良彦、静谷英一
・第５期活動報告
・第５期決算報告及び監査報告
＜貸借対照表＞
資産合計87,260,147円（流動資産38,808,151円　固定資産48,451,996円）
負債合計　168,671円（短期借入金168,671円）
正味財産87,091,476円（うち当期正味財産増加額2,215,066円）
＜収支内訳＞
収入合計13,591,266円（会費収入1,726,500円　寄付収入2,461,981円　研修収入7,990,999円　他）
支出合計11,376,200円（減価償却費を除いた実質支出10,441,476円）
当期収支 2,215,066円（減価償却費を除いた実質収支3,149,790円）
・第６期活動計画
・第６期予算（案）
＜収支予算案＞
収入合計15,000,000円（会費収入1,000,000円　寄付収入13,000,000円　その他の収入1,000,000円）
支出合計11,770,000円（減価償却費を除いた実質支出10,620,000円）

当日の資料、議事録は、あぶらむの会ホームページに掲載しています。
http://www.abram-no-kai.com/
画面右メニュー　"会員専用ページ"（パスワード：UTE48）にログインして、
画面右メニュー　"2017年総会・講演会報告"をクリックしてください。

『第６期通常総会について』

今回は東京で総会を開催させていただきます。多くの方のご参加をお待ちしています。
2018年度会費納入いただいた会員各位に対して、１月下旬～２月上旬頃に第６期通常総会の正式案内状を郵送させていただきます。

日時：2018年３月３日（土）16：00～（15：30～受付開始）
場所：立教学院チャペル会館第一会議室（東京都豊島区西池袋3－34－1）
議案：第１号議案　第６期活動報告、決算報告、監査報告
　　第２号議案　第７期活動計画、予算案

2017年あんなこと（あぶらむこの一年）

１月・全く雪のない正月、海外ボランティア３人を加え新年を祝う
　・７日～９日　あぶらむ雪祭り。沖縄より多数の参加者、しかし里には全く雪なし。四十八滝林道にてかろうじてソリ遊び。帰る日の朝、やっと雪景色となる。
　・13日より雪　本降りとなり大雪となる。
２月・厳冬期というのに雨の日続く、積った雪が重くなり、グチャグチャになり最悪の状態。
　・20日　早くも春一番吹き荒れる。敷地内道路雪起し、例年より半月以上早い。
　・25日　東京にて　あぶらむの会理事会
　・28日　越冬した蜜蜂飛びはじめる。
３月・ナメコ植菌
　・11日　猪伏山雪上ウォーキング
　・18日　あぶらむの会総会（場所　あぶらむ　参加者24名）
　・25日　春一番の会
４月・12日　池にカエル産卵、これを合図に雪囲いや水止等冬モードの解除。
　・21日～24日　第24回さくら道国際ネーチャーラン開催（名古屋－金沢　250km走）
　・下旬　宿裏手の雪囲い新築
　・30日　畑起し
５月・２日　田起し
　・３日　ジャガイモ植え、里の桜満開
　・20日　田植え、50年前、愛楽園の澄井中学校３年生だった塩川君の突然のあぶらむ訪問、13才だった少年が63才になっていた。浦島太郎の心境、でも嬉しかった。
　・28日　サンティヤゴ巡礼に出発。
　・30日　サン・ジャン・ピエ・ド・ポー出発
６月・27日　目的地　サンティヤゴ・デ・コンポステーラ着
　・28日　帰国の途に着く

・30日　一ヶ月振りにあぶらむに帰る。途中バスがなく、松本－平湯間生まれてはじめてヒッチ・ハイクする。この旅一番の難所だった。

7月・夏の各プログラム受入れ準備。

・旧木工所のベランダづくり開始。

・旧木工所の機械類、新作業棟に移転。

・28－29日　岐阜　生と死を考える会　合宿研修

・30日～２日　立教大学ＰＲＣ合宿研修、今年は参加者39人の大所帯

8月・４日～９日　あぶらむ里山自然学校、サポートスタッフを加え総勢35名余。

・16日～21日　立教小学校　あぶらむキャンプ（21名）

・22日～25日　聖公会大阪教区教会学校キャンプ　・１年９ヶ月振り、20人目の家裁少年来る。

・26日　第10回　桂　歌之助落語会　叱られ亭毎日、人生一回切りの初高座

9月・１日～　高柳　真「沖縄愛楽園で出会った人々絵画展」開催

・17日　あぶらむ創立30周年記念コンサート、及び祝会（参加者80名余）

・21日～23日　稲刈り　ユンボⅡ故障、多額の修理費かかる、３号機購入を決定。

・30日　大阪教区芦屋聖マルコ教会にて講演

10月・１日　釜ヶ崎にてカトリックの本田哲郎神父にお目にかかる。

・４日　高山の児童相談所とファミリー・ホーム設立にむけて意見をかわす。

・５日　脱穀　56袋（史上最高）

・７日　第10回　ＷＡＹＮＯ　アンデスの風コンサート

・８日　第１回　大人の学芸会、持寄りコンサート盛況。松タケ採れる。

・２年間ほどおとなしかったイノシシ、再び里内を荒しまわる。

・11～12日　ＪＡ看護専門学校　あぶらむ宿泊研修

・28日　ユンボⅢ　納車

11月・落葉集め開始、今年はドングリ全くできず。動物たちエサ不足

・16日　初雪　高山児童相談所より　ショート里親として小２の女児　３日間預かる。

・21日　朝一面の雪景色、積雪15cmなど、除雪車初出動。

・22日～27日　あぶらむ30周年記念プログラム　青木恵哉師の足跡を訪ずねての旅と桂 歌之助落語会 in 愛楽園のため沖縄へ。足跡の旅　参加者28名、落語会80名余。

・越冬準備　あれこれ

◎３日～７日予定の法明さんが案内する韓国慶州の旅、半島情勢不安定等諸搬の理由で取止めとしました。

12月・11日～15日　東京へ

・あぶらむ通信　発送

・23日　あぶらむクリスマス会、一年ご苦労さん会。

写真で見る2017年

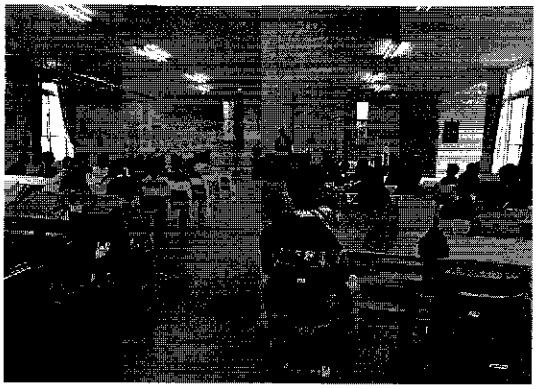
ユンボの引退
あぶらむの里づくりに15年働いてくれた30才のユンボ2号。人間でいえば多臓器不全状態となり3号機に交替。修理されて途上国でもう一働きするという。戦友との別れのような気持だった。

サンティヤゴ巡礼の旅
パンツ兼用のユニクロ股引に半ズボン。歩きやすさといい、洗濯や日焼け防止にこのスタイルが一番だった。まるで敗残兵のよう。戦友となったフランス在住の鈴木さんとのツーショット。

高柳 誠　絵画展
あぶらむ祈りの館諸魂庵に展示された愛楽園で出会った人々と作者。苦難の人生を生き抜いてきた人々の安らいだ顔がそこにあった。

逃れの島　ジャルマ島
家を焼き打ちされた青木先生達は内海に浮かぶ小島に逃れた。水もなく時化(しけ)の時は島全体潮をかぶる環境の中半年間生活し、その間に2名の病友を見送った。天気悪く島渡りができるか心配されたが、その時だけは凪いでくれた。

青木濠
海岸にできた自然濠。ここが青木先生の書斎であり、祈りの家であり、逃れの場でもあった。



桂歌之助落語会 in 愛楽園
園内の祈りの家教会で催された落語会。80人ほどの参加を得た。十字架を背負っての歌之助さん、重かったようで……。

2018年　こんなこと（行事予定）

１月・屋根の雪おろしと第２あぶらむ物語原稿書き
２月・10日～12日　あぶらむ雪祭及び、四十八滝周辺雪上ウォーキング
　　・24日～25日　猪伏山雪上ウォーキング
３月・３日　第６期あぶらむの会総会（於、立教大学チャペル会館）
　　・17日～18日　春一番の会
３月・24日～４月４日　第16回　子どもから大人までのネパールの旅
４月・20日～23日　第25回さくら道国際ネーチャーラン（名古屋－金沢250km）
５月・19日　田植え（予定）
８月・４日～９日　あぶらむ里山自然学校
　　・25日　第11回　桂　歌之助落語会
９月・22日～24日　稲刈り（予定）
10月・６日　第11回　ＷＡＹＮＯ　アンデスの風コンサート
　　・７日　第２回　大人の学芸会－持寄りコンサート

※2017年はあぶらむ創立30周年記念ということで少々頑張りすぎましたので、2018年度は少々減速致します。あぶらむは人との出会いによって生まれるプログラム（企画）です。新しい出会いとそこからの企画が生まれればその都度ご案内致します。

寄付者一覧（'16年12月13日～'17年12月17日）敬称略

㈱アリミノ田尾兵二／安藝淳二／阿久津富男／浅野純子／朝比奈誼／池淵透／李禎善（イジョンソン）／一柳典利・百／伊藤宣子／今関公雄／岩崎静子／岩田幼稚園／鵜川久・貴子／鵜川雅行／江崎忠男／江洲良秀／大郷穣／大阪合同子供キャンプ一同／沖縄聖マルコ保育園／萩野登／小野田恵子／片山佳子／加藤寛／川口基督教会／韓国カトリック教会神父一同／北山和民／木ノ内美代治・伸子／金城由美子／倉石昇／黒崎光太郎／香村美成／小島正則・幸子／小柳證／財満研三郎・由美子／坂本吉弘／佐々木慶太郎／笹部昭博／佐藤耕一／佐藤芳子／沢野弥生／静谷英夫／下地道子／島袋洋子／清水幸平／新開春樹・桂／新家恵子／進藤武・芳子／杉浦進・恵美／杉木峯夫／鈴木知子／鈴木武次・保子／スティーブン クロフツ／清家美佐子／税理士法人JMS代表岩沢満／曽根恵美子／高柳真／武原司奈／棚橋忍・美江／谷口茂雄／谷章子・こころ／谷中秀治／俵里英子／丹安紀子／中部学院大学宗教委員会／寺田信一／東京セントポールライオンズクラブ／藤堂順平／桃原松五郎／遠山章夫・秀子／富永紀子／富山聖マリア教会／中島務／中村力・英子／中村芳枝／西田浩子／日本聖公会芦屋聖マルコ教会／野田修助・和子／野田直人／長谷川勉／長谷川秀司／畑井正春／畑野栄一・寿子／速水直子／原川恭一／比嘉良行／比屋根るり子／福岡女学院中学校・高等学校／福留祥子／藤井和彦／武藤六治／古川斉／北條鎮雄／星野一朗／前田晃伸・容子／前田康雄／松井勲／松戸聖パウロ教会／松平信久・紀代／水谷小枝子／三村英夫／宮城正子／宮古聖ヤコブ教会／宮田洋子／宮本房江／三好洋子／八木克道／矢崎ふき子／矢部直美／山城清子／横浜聖クリストファー教会／吉川恵子／レーマン幸子

物品寄付者一覧（'16年12月13日～'17年12月17日）敬称略

㈱アリミノ　田尾兵二

ガヴィス基金　本年度支援先

NPOアジア子どもの夢

2016年会費納入者一覧（'16年12月13日～'17年12月17日）敬称略

相沢牧人／赤井充也／赤松道子／朝野恵美子／朝比奈誼／朝比奈時子／味岡敏江／穴井悦子／雨宮寿子／飯島千津子／飯田孝太郎／池淵透／井沢夫佐子／石原つや子／一柳典利・百／伊藤幸史／伊東日出子／井上るみ子／今関公雄／入野豊／岩佐葵史子／岩間光雄／上田敏明／上村誠・洋子／鵜川久・貴子／梅沢雪子／大家俊夫／大城恵子／太田喜元・昌子／大平和子／大房健樹／岡野峻／岡登信義／小川卓／尾崎和廣／小野翠／小野裕・伸子／笠井正志／笠原雅子／片岡義博／勝山千里／加藤正／金子眞／加納美津子／鏑木武弥／唐木田麻起子／川合昇／河合由美子／川口弘二・暁子／河田健二／河野裕道／川満すわ子／岸元忠義・静江／久世晴靖／倉石昇／倉辻明男／栗山盛雄／栗山洋子／黒田則子／小池直子／小林賢三／小松純一／小柳證／近藤弘／斉藤寛明／酒井厚子／櫻井智則／笹岡淳也・由

紀子／佐々木国夫・紀久江／佐藤耕一／佐藤純／佐藤哲典／佐藤敏子／佐藤裕／佐藤芳子／座間幹生／沢野弥生／三瓶富子／塩田純子／下地道子／篠宮慶次／柴原薫／渋沢一郎／渋谷眞理／島袋洋子／島文子／清水幸平／清水靖夫／志村弘子／下畑幹／城下彰／菅原美穂子／杉浦幸恵／杉村進／杉本良平・和子／鈴木暁／鈴木武次・保子／鈴木千絵／鈴木知子／鈴木信子／鈴木康仁／ストップス静江／砂川博秋・美智子／聖母訪問会／仙敷正俊／高田建夫／高野永／高橋保／高濱友理江／高柳真／竹中浩／竹村真紀／田中篤／田中孝子／谷昌二／俵里英子／丹安紀子／筑井宏子／千場恵子／佃寿子／寺谷恵美子／時高照子／泊哲次／富永隆史・敦子／友野博樹・和子／豊永泰子／直井雅子／永井深雪／長坂尚／中台信子／中山美世子／長谷幸雄／西垣正子／西川照／西口晃／西口喜久枝／西村正和／根本利子／野崎久子／野田修助／萩尾出穂／羽柴加寿代／土師晴子／長谷川秀司／畑井正春／畑中幸次郎／日暮直子／日野忠一／福田亜矢子／福田一太／福田桂／藤井誠・ひろ子／古市進／古川秀昭・昭子／古澤昭夫・タイ／星野一朗／星野直子／細川哲士／前田晃伸・容子／前田晃・広世／前田眞智子／松井勲／松岡龍哉／松田捷朗／水谷小枝子／溝際庸介／三原エイ／三原一男・京子／宮城正子／宮崎秀貴／宮脇加代子／武藤六治／宗像千代子／室岡恵／衆樹歩実／八木克道／矢後和彦・正子／山内寿美子／山口泰生／山崎剛／山崎美貴子／湯田啓一／吉植よし子／吉野美智子／吉野康／若園紘志

新規会員（'16年12月13日～'17年12月17日）敬称略

下地道子／鈴木暁／水谷小枝子／山崎剛／湯田啓一

《「あぶらむの会」について》

「あぶらむの会」は旧約聖書創世記に出てくる、信仰の父アブラハムの旅立ちの前の名前、「アブラム」に由来しています。それによれば、彼はその内的必然性故に、安住の地を離れて「行く先知らずして」旅立ちました。全てに対してあまりにも安定を求める今日、私たちは旅としての人生に臆病になり、旅に必要な能力を欠いているように思われます。

「あぶらむの会」は、自己の人生に果敢に挑戦し、人生の良き旅人を育てるため、それに必要な訓練や出会いの場を提供してゆくことを目的としています。